

地方
小出版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円
	(本体 139円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

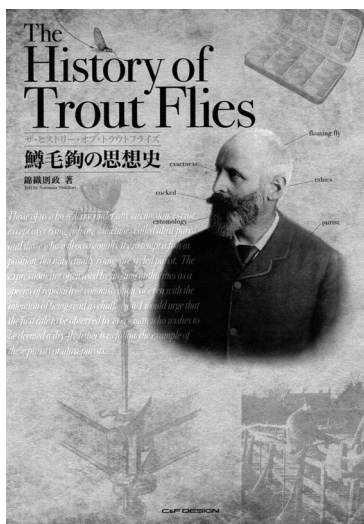
すなど 釣りは漁るのみにあらず —◆◆ フライフィッシングからみた文化発展論

文・釣魚史家 錦織則政

本書は、欧米で野外スポーツとして発達してきた、鱒(トラウト)を狙うフライフィッシングに用いられる毛鉤(フライ)の発展史を描いたものです。映画「リバー・ランズ・スルー・イット」のなかで主演のブラッド・ピットがやっていたこの釣りのことをご記憶の方も多いでしょう。

フライフィッシングの歴史は古く、早くも紀元3世紀の古代ローマ帝国の史料にはマケドニアの川で毛鉤を振る者の記述がみられますが、史上、この釣具を専らにいつくしみ鍛え上げる役割を担ったのはイギリス人でした。15世紀イングランドのとある修道女は月ごとに適した12種の毛鉤のレシピを記しましたが、そこには明らかに昆虫のイミテーションが企図されていました。この時代の毛鉤はまだ簡素なものです。目の前を飛んでいるカゲロウなどの羽虫を模倣して釣鉤に羽根や獣毛を巻きつけ、鱒を騙して喰いつかせようというコンセプトは、このころより存在していたのです。

他方、この模倣性を追求する思想が生まれたのと同じくらい昔から、毛鉤が本物の虫に似ている必要はない、と嘯く者たちも存在しました。鱒は美味そうに見える何かに興味を惹かれるのであって、それが目の前を飛んでいる羽虫に似ているかどうかなど問題ではない、というのです。澄んだ流れには毛鉤の粗が目立たぬよう味で小さなものを用い、濁った流れには大きくて目立つ色彩の毛鉤を用いるのが彼らの流儀です。魚の立場から毛鉤がどのように見えるのか、その視認性を重視す



【ザ・ヒストリー・オブ・トラウトフライズ 鱒毛鉤の思想史】錦織則政著/C&F DESIGN発行/2018年3月発行/ISBN978-4-909415-01-1/税込価格6,912円

る釣り人たちの系譜もまた、今日まで連続と続いています。

毛鉤の発展を突き動かす原動力

この「模倣性主義」と「視認性主義」をめぐる絶えざる論争こそ、毛鉤の発展を突き動かす原動力でありました。19世紀末のこと、イギリスでドライフライ(水に浮く毛鉤)の釣りが流行すると、釣り人はそれまでの毛鉤の簡素なスタイルを捨てて、羽虫を可能な限り精確に模倣しようと努めました。釣魚史家はこれを「厳格なる模倣」主義と呼びます。糸を胴にらせん状に巻く回数を羽虫の体節数に合わせ、頭に巻く糸の色を羽虫の複眼の色彩に合わ

せるだけでは飽き足らず、ついには同種のイミテーションを雌雄別に巻き分けるほどの徹底振りでした。

それが20世紀に入ると、次世代の釣り人たちはこの「厳格なる模倣」に疑問を抱き始め、「果たしてドライフライは、水中の鱒にとって、我々が見るのと同じように見えているのだろうか?」と考えました。毛鉤の姿を、釣り人の視点ではなく魚の視点から捉えることによって、20世紀の毛鉤理論は飛躍的な進歩を遂げたのです。魚が太陽に向かって水面上の羽虫を見ると、その視野に入るのは、水面に映ったおぼろげなシルエットでしかありません。また色彩を帯びて見えるのは、翅や一部の胴といった透明性を備える部位だけです。後に「ネオ・イミテーションリスト」と呼ばれるこの思想家たちは、羽虫のシルエットそのものを模倣する毛鉤や、羽虫の羽ばたきが生み出す光沢感を模倣する毛鉤、あるいは鱒がもっとも注目するとされる羽虫の胴の透明性を模倣する毛鉤など、さまざまなスタイルを生み出しました。これらの毛鉤こそ、それまで二律背反とみなされてきた「視認性主義」と「模倣性主義」が互いに溶け合うことで得られた成果なのです。

ところが、これら革命家のなかからも、さらに先を往く者たちが登場します。20世紀中頃、あるアメリカの理論家は当時の前衛美術をめぐる議論に興味を惹かれました。従来の釣り人が唱える、羽虫の姿を構成要素ごとに分解して個々に理解したあと、それらを精緻に組み立て直す表現論が科学的アプローチであるとするれば、この人物が主張した芸術的アプローチとは、その姿を全体的・直観的に把握し、その核心部分——その虫を象徴する要素、いわば「虫っぽさ」——を描き出す表現論と説明することができるでしょうか。鮮やかに胴を彩る紅色の絹糸、あ

るいは尻に丸々と盛りつけられる緑のクジャクの羽根など、あえて誇張しデフォルメされた「虫っぽさ」が、水面のレンズ効果によって歪められることで、魅力的な像となって魚の眼に映るというのです。この本物を超える本物らしさこそ、究極のイミテーションであると論じられました。さらにもうひとつの例を挙げると、さる高名なイギリスの釣り人は、その要素が毛鉤の「細身さ」と「簡素さ」にあるとの結論に辿りついたのですが、この「進歩」が、実は大昔の素朴なスタイルへの“回帰”でもあったという史実は、現代の釣り人に大切な何かを問いかけているように思われます。

西洋美術史と重なって見える

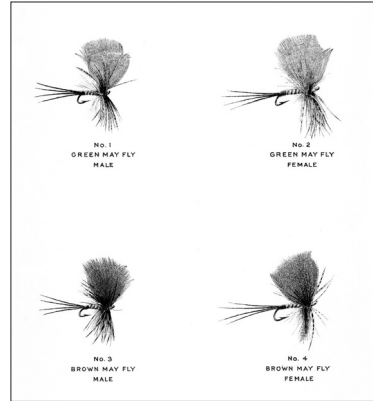
筆者にはこの歴史の展開が、西洋美術史と重なって見えるのです。石器時代、洞窟の壁面に素朴に線描されていた絵画は、15世紀に遠近法の技術が登場することで、本物と見紛うばかりの写実性を獲得しました。ところが、まもなく遠近法の揺らぎを試みる者が現れてこの法則は崩壊を始め、19世紀末になると印象派の画家たちはキャンバスから奥行きと輪郭を捨て去ります。そしてついに、20世紀の画家たちは陳腐化した古い様式を乗り越えて、風景が白地に点と線だけで描かれる終局をもたらしましたが、あらゆる可能性を突き詰めた末にたどり着いたその素朴な風景——いつかみた線描——は、一抹の寂しさを湛えつつもなお豊穡であったのです。

文化の歴史は円環する。しかし、その「表現様式の堂々巡り」も決して無駄ではありません。絵画であれ毛鉤であれ、使い古された様式に新たな思想を吹き込むことで、愉しみは一段の高みへと進むのです。釣りは漁るのみにあらず。文化としての釣りを愉しむ人々は、そのらせん階段を一喜一憂しながら昇ってゆくべき存在なのでしょう。

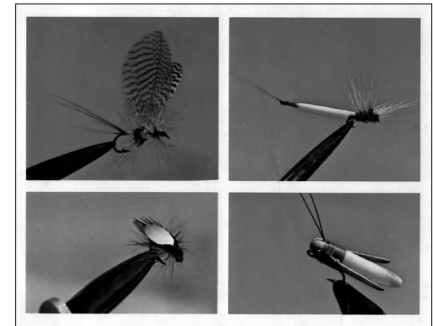
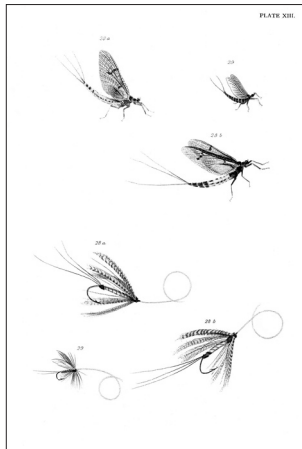
さて、本書の編集作業には、丸1年を要しました。構成／装丁担当の大川進さんによれば、明朝体の「筆者文」とゴシック体の「引用文」、そして両文の要所要所に紐づけられた1,015篇もの「註釈文」、という3種類の文章が入り混じりながら進行する膨大な



▲18世紀の釣り人と毛鉤



▲「厳格なる模倣」の作例



▲ネオ・イミテーションイズムの作例

◀19世紀の毛鉤とその模倣先

文章の構成作業は、筆舌に尽しがたい苦労の連続であったそうです。書体ごとに微妙にずらした文字級数の影響もあって、レイアウトが完了する最後の段階まで、本書が全部で何ページになるのかわからなかったとのこと。お疲れさまでした。

また、気鋭のフライタイヤー（毛鉤製作者）長田規孝さんに、本書に登場する毛鉤をオリジナル・レシピに可能な限り忠実な姿で巻いてもらって、その掲載のために34枚のカラーページを用意しました。古今の釣鉤をこれほど美しく、英系と米系の微妙なニュアンスの違いまできちんと巻き分けられる名手を、筆者は寡聞にして他に知りません。

その毛鉤を撮影したのが東知憲さんで、併せて総編集長の大役も担って頂きました。彼曰く、『筆者は情報密度

に重点を置き、編集者は風通しよくメリハリのある作りが好みであったので、製作作業はそのせめぎ合いであった。』とのこと。そうでしたね、編集方針をめぐって互いの考えを何度もぶつけ合った説得と譲歩の日々も、今は嬉しい思い出です。

筆者は著作を生業とする者ではないのですが、今回、一冊の本を世に出すことがかくもドラマチックで、かくも心に深く刻まれる作業なのだ気づかせてくれた関係者の皆さんに、改めてお礼を申し上げたいと思います。そして最後に、商業的利益とはまったく無縁の原稿に出版のチャンスを与えて下さった、(株)シーアンドエフデザインの米ノ井公夫社長に篤い感謝の念を捧げます。

＊

(にしこり りりまさ／釣魚史家)

新刊ダイジェスト

※価格は税込(消費税率8%)表示です。

『真田家松代藩上ヶ屋口留番所文書の研究』 ●馬場範明著



口留番所とは、江戸時代、諸藩が出入りの旅人の監視や藩内の物資が他領に流出するのを防ぐ目的で、藩境に設置した小規模な関所のこと。松代藩(真田家)の場合は20か所あったという。その中の一つ、上ヶ屋村口留番所に関する古文書を紹介しているのが本書である。藩の北部に位置する戸隠街道筋に置かれた。責任者は、代々「馬場庄右衛門」(著者の御先祖。19世紀初頭に一時、兄弟関係にある重(十)左衛門が任じられたこともある)を名乗っており、世襲制であったことがわかる。病気を理由に役職を息子

に譲りたいと郡奉行所に願い出た際、他の口留番所からお墨付きをもらっている。口留番人同士の横の繋がりもあったか。800点近くある文書の中でとくに多いのが通行手形で約400通。そのほとんどが酒樽運搬のもの。また19世紀半ばに多発した地震などで破損した番所の修復や、天保の飢饉頃の「戸隠神領上野村騒動」(天保8年<1837>)などの古文書も残っている。

◆2,160円・B5判・126頁・歴研・東京・2018/4刊・ISBN9784865480580

『沈黙する伝承 一川上村における南朝皇胤追慕』 ●増田 隆著



山深き吉野の里は古来、政争に敗れた多くの者たちの隠棲の地となってきた。返り咲く者がある一方で、殺害されあるいは非業の死を遂げる者も少なくなかった。足利幕府に追われ、南朝を開いた後醍醐天皇と後胤たちも同様である。後胤の歴史は「後南朝」と称されるが、深く闇に葬られ、史料はきわめて乏しく、実態はほとんど知られていない。著者は、僅かな史料や、拠点とされる川上郷(現奈良県吉野郡川上村)の郷土たちが参集して始め、今日まで560年に及んで村人たちが伝承する「朝拝式」

から、隠された真実の欠片を掘り返そうとする。「朝拝式」は朝賀の儀を再現したもので、袴袴に威儀を正して行われる。南朝への追慕であるとともに、先祖の軽々しい行為が南朝を屠ったことへの悔恨の念からだという。外部に漏らされることのなかった儀式であったが、8年前に村指定の無形文化財となり、こうして精緻な物語が記され、歴史の陥穽が埋められたことは感慨深い。

◆1,512円・四六判・271頁・京阪奈情報教育出版・奈良・2018/2刊・ISBN9784878065101

『東日本大震災と公共交通1 一震災を乗り越え甦る鉄道とバス』 ●鈴木文彦著



東日本大震災は地震・津波・原発事故と多くの被害をもたらし、公共交通機関に与えた影響も甚大でした。本書は震災後早い時期から現地を取材してまとめられた、震災時の公共交通のレポートです。特に被災地におけるバスの記録に重点が置かれているのが特徴です。電気がなくても動かせるバスは、震災の翌日から早速動き出します。鉄道の不通が続く中、路線バスは多くの人の足となり、高速バスは被災地と他の地域を結びました。もちろん乗務員や事務員も被災者です。それでも道路事情などが刻々と変

わる中、何が求められているかを考えバスを動かしました。撤退した地域にも昔の経験を活かし臨時便を走らせています。個人の力では対処できない非常時にこそ公共交通はその真価を発揮します。普段は利用者の多くないJRのローカル線も燃料輸送に活躍するなど、結局最後に頼りになるのはシステムの汎用性とそれに携わる人たちの尽力であるということが伝わってきます。

◆4,320円・A5判・335頁・クラッセ・東京・2018/4刊・ISBN9784902841213

『田の神石像・全記録 一南九州の民間信仰』 ●八木幸夫著



現在の鹿児島県と宮崎県の一部、旧薩摩藩領に分布している田の神像(タノカンサー)は、江戸中期に一般庶民の手で作られ始めと言われる。道路沿いや水田に置かれたり、個人持ちや持ち回りのものがあり、農耕神、豊饒神として祀られてきた。本書に掲載されている古い田の神像の写真をみると、一見、頭巾をかぶって小槌を持ち、大きな袋を肩にかついでいるふくよかな大黒様かと見えるが、よく見ると、頭にかぶっているのはシキと呼ばれる笠で、右手にメシゲ(しゃもじ)を、左手には腕を抱えている。

シキとは米を蒸す時に使う藁の編み物で、これにしゃもじと腕とくれば、豊饒を祈念する民俗的シンボリズムは、福の神である大黒天と共通するものがあるようだ。本書では、鹿児島、宮崎の田の神像2064体の資料が纏められているが、著者は多様な田の神像をその形態から「神像系」「仏像系」「混合型・その他」に分類することで体系化している。田の神像出現の歴史的背景についても面白く読めた。

◆4,104円・A5判・178頁・南方新社・鹿児島・2018/4刊・ISBN9784861243752

『啄木賢治の肖像』 ●阿部友衣子著



岩手が生んだ日本を代表する文学者、石川啄木と宮沢賢治。ちょうど10歳違いの2人は2016年に啄木生誕130年、賢治生誕120年を迎えた。それを記念して岩手日報に連載された特集記事を書籍化したのが本書。理想と現実の狭間でもがき苦しみながら数々の作品を生み出し、短い生涯を駆け抜けた2人の足跡を「友」「両親」「女性」といった人との関わりや「山」「川」といった自然、「仕事」「お金」という現実面など、18の共通テーマに沿って辿っていく。間に「識者に聞く」としてその分野の第一人者の見解も

挿入。「手紙と日記」では、形式に捉われない啄木の手紙はまるで現代のブログ、10年間で13冊の日記を残した啄木とは対照的に賢治の日記は発見されていないが、時には自分へも手紙を書き、膨大な書簡を残したなど、2人を比較しながら素顔をあぶり出すのは新鮮。手軽な新書版で、ゆかりの地散策マップを巻頭に掲載。岩手の風土をも感じることができる。

◆972円・182mm×105mm判・311頁・岩手日報社・岩手・2018/4刊・ISBN9784872014211

地小出版

流通センター

ジャンル別 新刊案内

2018年5月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は税込(消費税8%)表示です。

【雑誌】

- ◆ゆきのまち通信 175 企画集団ぷりずむ編 A5 50頁 500円 企画集団ぷりずむ [青森] 978-4-503-21462-1 18/05
- ◆そらとぶこぎん 第2号 鈴木真枝編 石田 舞子編 A5 76頁 1000円 津軽書房 [青森] 978-4-8066-0241-5 18/04
- ◆SPRIDE vol. 23 2018年7月号 渡辺 直明編 A4 95頁 730円 下野新聞社 [栃木] 978-4-88286-695-4 18/06
- ◆GREEN REPORT 461 2018年5月号 廣瀬 仁編 A4 192頁 2800円 地域環境ネット [埼玉] 978-4-905457-93-0 18/05
- ◆響き合う街で No. 84 2018年5月号 やどかり出版編 B5 60頁 1296円 やどかり出版 [埼玉] 978-4-503-21465-2 18/05
- ◆くらしと教育をつなぐ We No. 214 2018年6/7月号 中村 泰子編 吉田 真紀子編 A5 80頁 864円 フェミックス

[神奈川] 978-4-903579-83-2 18/06

◆Be! 131号 No. 158 今成 知美編 A5 110頁 864円 アスク・ヒューマン・ケア [東京] 978-4-909116-04-8 18/06

◆児童芸文 2018年6-7月号 高橋 うらら編 A5 112頁 864円 あるまじろ書房 [東京] 978-4-904387-14-6 18/06

◆仏事 No. 212 2018年5月号 奥村 昇編 A4 100頁 1620円 鎌倉新書 [東京] 978-4-503-21451-5 18/05

◆月刊住職 No. 234 2018年5月号 矢澤 澄道編 A5 203頁 1404円 興山舎 [東京] 978-4-908027-51-2 18/05

◆子どもの文化 No. 566 2018年6月号 片岡 輝編 A5 61頁 313円 子どもの文化研究所 [東京] 978-4-503-21473-7 18/06

◆子どもと本 第153号 子ども文庫の会編 A5 48頁 637円 子ども文庫の会 [東京] 978-4-906075-57-7 18/04

◆the座 No. 95 高橋 彩子編 B5 40頁 1000円 こま

つ座 [東京] 978-4-503-21460-7 18/05

◆茶道の研究 No. 750 2018年5月号 三徳庵編 A5 92頁 540円 三徳庵 [東京] 978-4-503-21453-9 18/05

◆東京かわら版 No. 537 2018年6月号 佐藤 友美編 204mm×108mm 164頁 500円 東京かわら版 [東京] 978-4-503-21467-6 18/05

◆俳句四季 No. 490 2018年6月号 西井 洋子編 松尾 正光編 B5 160頁 930円 東京四季出版 [東京] 978-4-503-21461-4 18/05

◆みんなの図書館 No. 494 2018年6月号 図書館問題研究会編 A5 72頁 810円 図書館問題研究会 [東京] 978-4-503-21456-0 18/05

◆おりがみ No. 515 2018年7月号 日本折紙協会編 A4 51頁 786円 日本折紙協会 [東京] 978-4-86540-063-2 18/06

◆海運 No. 1088 2018年5月号 日本海運集会所編 A4 72頁 1296円 日本海運集会所 [東京] 978-4-503-21454-6 18/05

◆Fuji Airways Guide No. 649 2018年6月号 フジ・インコーポレーテッド編 B5 97頁 380円 フジ・インコーポレーテッド [東京] 978-4-503-21466-9 18/05

◆FRAGRANCE JOURNAL NO. 455 2018年5月号 宇野 浩一編 B5 108頁

売行良好書

期間：2018年5月15日～6月14日

【出荷センター扱い】 ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

- (1)『句集 ひとり』2160円・深夜叢書社 (2)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房 (3)『猫はしっぽでしゃべる』1512円・ナナロク社 (4)『かくれキリシタンの起源』4320円・弦書房 (5)『大谷翔平 挑戦』1404円・岩手日報社 (6)『日本縦断客車鈍行の旅』1728円・クラッセ (7)『こないだ』2160円・編集工房ノア (8)『ゆりちかへ』1404円・書肆侃侃房 (9)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスクヒューマンケア (10)『西南戦争 民衆の記』2376円・弦書房 (11)『耶馬溪紀行』1620円・のぶ工房 (12)『日本ワイン誕生考』3132円・山梨日日新聞社 (13)『殺人者の記憶法』2376円・クオン (14)『写真でわかる 磯の生き物図鑑 フィールド版 新装改訂』2160円・トンボ出版



【三省堂書店神保町本店 センター扱い図書】 ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

- (1)『昭和プロレスマガジン 46』1000円・昭和プロレス研究室 (2)『夜想#中川多理 物語の中の少女』3024円・ステュディオ・パラポリカ (3)『こないだ』2160円・編集工房ノア (4)『本の雑誌 421号』720円・本の雑誌社 (5)『東京かわら版 6月号』500円・東京かわら版 (6)『高尾山・景信山・陣馬山登山詳細図』823円・吉備人出版 (7)『連城三紀彦展』1080円・本多正一 (8)『ニッポンの本屋』2484円・本の雑誌社 (9)『箱根・湯河原登山詳細図全100コース』972円・吉備人出版 (10)『短歌タイムカプセル』1620円・書肆侃侃房

【ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本一センター扱い図書】 ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

- (1)『日めくり子規漱石』1080円・愛媛新聞社 (2)『中世の名門 宇都宮氏』1620円・下野新聞社 (3)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房 (4)『芭蕉布物語』1620円・榕樹書林 (5)『耶馬溪紀行』1620円・のぶ工房 (6)『熊本地震 あの時が』1836円・熊本日日新聞社 (7)『琉球菓子』2376円・沖縄タイムス社 (8)『奥多摩登山詳細図(西編)』950円・吉備人出版 (9)『熊本城の被災修復と細川忠利』1080円・熊本日日新聞社 (10)『かくれキリシタンの起源』4320円・弦書房

以下ホームページ等でも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
 URL : <http://neil.chips.jp/chihosho/> ツイッター公式アカウント : @local_small

トピックス — ★★

▼【長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産】が世界遺産となる可能性がほぼ確実となったとのことです。今回のこの話題によって〈潜伏キリシタン〉と〈かくれキリシタン〉の違いについて知った方も多いのでは。〈潜伏キリシタン〉とは、江戸時代の禁教期に秘かに信仰を続けた人々のことを指し、キリスト教解禁後もカトリックに合流せず、先祖伝来の信仰を守る人々を〈かくれキリシタン〉と呼ぶ



そうす。ところで全国紙にも取り上げられた関連書【かくれキリシタンの起源—信仰と信者の実相】(中園成生著/弦書房刊/本体価格4000円)では、このかくれキリシタンの土着化したキリスト教信仰について考察しています。「なぜ、250年もの禁教に耐えられたのか…現在も続く、かくれキリシタン信仰。多角的な研究から見えてきたのは、400年前の宣教師たちが日本人の精神と暮らしを理解して創出した〈日本人のキリスト教〉と、それを禁教の時代にも守り続けるために信者が選択した〈信仰依存〉という形だった…〈信仰を変容させた信者〉という従来のイメージをくつがえし、長年の〈かくれキリシタン〉論争に終止符を打つ。」(【かくれキリシタンの起源】帯文より)

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。

◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。

★地方・小出版流通センター

FAX : 03-3235-6182



三省堂書店

営業の
ごあんない

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM ~ 8:00 PM
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
 TEL. 03-3233-3312(代)
 URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

